

トーマス・マンの人物造形  
——ヴァーグナーと『ヴェルズングの血』をめぐる——

紀之定 真理恵

はじめに

1906年の *die Neue Rundschau* 1月号に掲載される予定であったトーマス・マン(1875-1955)の短篇小説『ヴェルズングの血』が当初の予定から遅れてようやく公刊されたのは、作家の死後、1958年のことであった。マンは1904年にミュンヘンの裕福なユダヤ人家庭の娘カーチャ・プリングスハイムと婚約し、翌年には長女エーリカが誕生している。カーチャの父親であるアルフレート・プリングスハイムは『ヴェルズングの血』の掲載に強く反対した。そのため雑誌はすでに刷り上がっていたにも拘らず、マン自身が出版社に撤回を命じた。<sup>1</sup>

舅のアルフレートがこの作品の内容を知った際激怒したことは、この小説の内容に鑑みれば当然のことと思われる。物語はベルリンに住む裕福なユダヤ家庭(アーレンホルト家)を舞台に展開される。夫妻には四人の子供がおり、主人公は末の双子の兄妹である。ディレタントとして描かれる兄ジークムントは、妹ジークリントと近親愛の関係にあり、ジークリントとドイツ人貴族ベッケラートとの婚礼が目睫に迫ったある日、この兄妹は二人きりで「ヴァルキューレ」の上演を観に出かけ、その夜ついに結ばれる。

アーレンホルト家とプリングスハイム家は裕福なユダヤ人家庭であるという点で似ており、カーチャも四人兄妹の末子で、彼女には双子の兄がいた。プリングスハイム家の人たちが、これは自身をモデルにした小説であると考えるのは極めて自然なことであろう。しかもそこでは近親相姦という、当時の社会では禁断のテーマが扱われていたのである。事態は、マンが結婚相手の家庭に対する、ひいてはユダヤ人に対する悪意や軽蔑を込めた

---

<sup>1</sup> なお『ヴェルズングの血』は、1921年に530部の限定私家版として出版されている。

小説を発表するらしいというスキャンダルにさえ発展しかけていた。

後述するように、マン自身に備わったそのような差別意識を否定することはできないが、しかし同時に、『ヴェルズングの血』は、その内容からリヒャルト・ヴァーグナーの四部作『ニーベルングの指環』第一夜「ヴァルキューレ」第一幕のパロディーであると見なすことができる。言うまでもなく、ジークムントとジークリントという名前は「ヴァルキューレ」での登場人物の名前であり、そこでも同様に近親相姦というテーマが扱われているのである。そして「ヴァルキューレ」第一幕が、「ヴェルズングの血よ、栄えあれ！ so blühe denn Wälsungenblut!」という英雄ジークムントの台詞によって締めくくられていることから、この二つの作品の関連性はますます疑い得ない。

このように見れば、『ヴェルズングの血』を、プリングスハイム家を誹謗するためのモデル小説ではなく、むしろ「ヴァルキューレ」のパロディーと見なすほうが自然である。ヴァーグナーは生涯にわたってマンに多大な影響を及ぼした芸術家であり、青年時代のマンはヴァーグナーの芸術に心酔していた。しかしこのパロディー化からはヴァーグナーに対する彼の態度の変化を窺い知ることができるであろう。というのも反ユダヤ主義的な思想の持ち主であるヴァーグナーが創作した逆境を生きるゲルマンの英雄を、現代の裕福なユダヤ人として描くということ自体、非常に挑戦的な翻案と見なすことができるからである。<sup>2</sup>

具体的な議論に入る前に、まずはヴァーグナーの「ヴァルキューレ」第一幕のあらすじを確認しておきたい。第一幕は序曲と三場面で構成されており、あらすじは以下のとおりである。序曲ではジークムント W が嵐の中を奔走する。第一場面で彼はジークリンデ W と巡りあい、二人でジークリンデ W の夫フンディングの帰りを待つ。この段階では、彼らはまだ互いに兄妹であることを知らない。第二場面では、三人での晚餐が催され、この場面はフンディングによるジークムント W への決闘の申し込みで終わる。第三場面では、ジークムント W が一人でそれまでの人生を振り返り、その後、彼のもとへジークリンデ W がこっそりと忍び寄る。彼らは互いに双子の兄妹であるということを認識し、ついに結ばれる。<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 以下では両者の混同を避けるため、ヴァーグナーの創作した双子はジークムント W・ジークリンデ W とし、マンによるそれはジークムント M・ジークリント M として区別する。

<sup>3</sup> リヒャルト・ヴァーグナー『オペラ対話ライブラリー ヴァーグナー ニーベルングの指環(上)』(高

本稿では、主として「ヴァルキューレ」第一幕と『ヴェルズングの血』、さらには、『ニーベルングの指輪』と『ヴェルズングの血』との比較検討を行うことで、このパロディーに現れるモチーフの内実に関する考察を行うこととする。

## 1. 転換期の葛藤

### 1-1 若いマンの芸術家像

マンの処女作である短篇小説『転落』が *Die Gesellschaft* に掲載されたのは 1894 年のことだが、1898 年には最初の短編小説集『小男フリーデマン氏』が出版される。これに続く『ブデンブロック家の人々』(1901) や『トニオ・クレーゲル』(1903) が好評を博し、当時マンは着実に人気作家としての地位を確立し始めていた。そのような変化と呼応するかのよう、彼はミュンヘンでサロンとなっていたプリングスハイム家の娘と結婚することになる。

こうしたマンにおける変化は、単に外面上の変化に留まらず、以下で見るように彼の作品そのものにも影響を及ぼしており、転換期ゆえの混迷のさなかに執筆された『ヴェルズングの血』の主人公ジークムント M の人物像に凝縮されているのである。マンがトニオ・クレーゲルを始めとして描いてきた「芸術家」と同じ特徴が、ジークムント M に付与されている。ここでの「芸術家」は、周囲から際立つほど明敏であるがゆえに共同体から孤立し、孤独のなかで自身の芸術を成就させる者とされている。これはマンによる自らへの評価とも一致するものだが、他方で、ジークムント M は自身の才能を開花させることができない人物なのであり、他の主人公たちと同じ特徴を持ちながらも、彼らとは異なる視点で描かれているのである。その意味で、ジークムント M の人物像は、マンによる自己批判によって形作られていると理解することができ、その人物像は、彼が作品のなかで描いてきた主人公への批判をもとにして形作られていると理解することができるだろう。

こうした点を踏まえ、1907 年に *Literarisches Echo* に発表されたごく短いエッセイ「鏡にうつして」での「芸術家」についての言及に注目してみたい。この作品で、「芸術家」批判を介した辛辣な自己批判を行うことにより、マンは、「芸術家」崇拝への警告をなすのである。当時彼はドイツの人気作家としてすでに少なからず名声を博しており、編集者

---

辻知義 訳、音楽之友社 2002 年)、138-177 頁参照。以下『ニーベルングの指環 (上)』と表記。

からも文学的名士として待遇されていた。彼はそのことを喜ばしく感じる一方で、自らの評価と世間でなされている評価に大きな違いがあるという戸惑いを抱いていた。このエッセイで語られているのは、主としてそうした自身を取り巻く状況に対する違和感である。その複雑な心情は、冒頭部の以下に引く箇所においてすでに吐露されている。

敬愛する編集者よ、あなたの鏡の中に映された私の姿は、意外な思いのする不快なものであります——それが私にとって主観的には少なからず好ましいということは認めますが、もっと高い意味ではそれを承認いたしかねる、ということをはっきり申し上げておきます。<sup>4</sup>

これに続く箇所でマンはそれ以前の人生を振り返り、自身の経歴やかつての怠惰な生活をことごとく非難する一方で、その後の順境に触れながら、現在も以前と同じことを続けているだけだと述べている。現在の生活に至った成り行きを訝しげに自問するのである。

これらの言動は、一見すると、ようやく世間から正当な評価がなされるようになったというある種の自賛であるとの印象を与えかねない。そのことを全く否定することはできないが、彼は続けて、自身を含む作家について、彼らがどのような性格を持つ者たちなのかを告発している。彼は作家に対して罵声を浴びせると同時に、彼らへの社会からの尊敬は不可思議なものだと述べている。<sup>5</sup> そして、この小論は、自己の置かれた状況に対する以下の言葉によって締めくくられる。

私にとってこれ〔当時の順境〕は好都合であると言えます。私はこれによって得をしています。しかしまともなことではありません。これは悪徳を鼓舞し、美德を立腹させずにはおかないことです。<sup>6</sup>

マンは目まぐるしく変化する環境によって一変した自身の立場への戸惑いを示しつつ、自

---

<sup>4</sup> Mann, Thomas: *Im Spiegelk.* In: *Thomas Mann Gesammelte Werke in dreizehn Bänden* (以下 *TM-GW* と表記) XI. Frankfurt am Main 1974, S. 329.

<sup>5</sup> Mann, Thomas: *Im Spiegelk.* In: *TM-GW*, XI, S. 332.

<sup>6</sup> Mann, Thomas: *Im Spiegelk.* In: *TM-GW*, XI, S. 333.

身に対する世間からの評価には誤解があると述べているのだが、ここで彼は、辛辣に自己批判的とも言える指摘をすることで、大衆の「芸術家」崇拜が持つ危険性を指摘しているようにすら思われる。そもそも彼は、大衆の評価とは異なる小説家としての自身を「文学者 Dichter」としてではなく、いかがわしい性質を備えた「ボヘミアン Boheme」<sup>7</sup>と捉えていたのである。

とはいえ、ここでのマンの発言を字義通りに捉えることはできない。『ヴェルズングの血』の掲載を断念せざるを得ない状況に追い込まれた際の彼の発言は、そのことを端的に示していると言えるだろう。彼は兄ハインリヒに宛てた書簡において、「ぼくは、人間的にも社会的にも自分がもはや自由でないことを承認せざるを得ません」<sup>8</sup>と嘆いているが、この発言には彼の小説が、少なくとも読者一般に向けられたものではないということが示されており、彼の執筆活動の遊戯性や無責任さが露見しているとも捉えることができるからである。すなわちマンは、戦略的に被追放者を演じることで、あらゆる社会的責任から逃れようとしたのである。

こうした後ろ向きの理由によって彼が目指した自己目的としての「芸術」は、当然のようにその思惑とは異なるものとして受容されることになった。彼が言うところの「芸術」は、誤認される危険を大いに孕んだ観念であり、この点については、後にナチスがマンを味方に引き入れようと接近してきたことから明らかである。

自身を取り巻く環境の変化によって被ったマンの戸惑いは、それまで免れていた責任、あるいは対峙せず済んでいた社会が自らの眼前に迫ってきたことに起因している。またそうした彼の戸惑いは、どの程度までか定かではないにせよ、彼自身が描いてきた「芸術」の欺瞞性を自ら認識し始めたことによる戸惑いなのであり、この心境の変化を、とりわけ『ヴェルズングの血』において鮮明に確認することができるのである。というのも、この作品にあって、過去の作品における主人公と、かつて心酔していたヴァーグナーの作品およびそこでの英雄は、批判的に踏襲されているからである。以下では以上の点を踏まえ、主人公ジークムント M に焦点を絞り、考察を進めていく。

<sup>7</sup> Mann, Thomas: *Der Künstler und die Gesellschaft*. In: *TM-GW*, X, S. 389.

<sup>8</sup> Mann, Thomas / Mann, Heinrich: *Thomas Mann Heinrich Mann Briefwechsel 1900-1949*. (以下 *TM-HM* と表記) Hrsg. von Hans Wysling. Frankfurt am Main 1968, S. 45.

## 1-2 ジークムント M

前節で見たマンにおける「芸術家」のイメージは、ロマン主義の時代に顕著な「芸術家」の典型であると言えるだろう。<sup>9</sup> 極めて一般的な定義ではあるが、その意味での「芸術家」は社会に語りかけることを目的とせず、専ら内省的で、市民社会から離脱していることにこそ価値を見出している。マンによる、自己を含む「芸術家」へ向けられた批判や、その根拠もまた、すでに語りつくされたものであった。青年時代のマンは、このような「芸術家」をいかがわしく、反=社会的な存在と見なす伝統的な言説に疑うことなく馴染み、大衆との差異を誇らしく感じていたのだが、かつてはアウトサイダーとして否定的にのみ捉えられていた「芸術家」は、彼らの特権とされていたものが社会的に共有されることで、遂には社会の一員と見なされるようになった。そして「芸術家」を、稀有な才能の持ち主として尊敬すべきだとする言説までもが登場した。こうして世間の注目を浴びることとなった「芸術家」には、当然のように社会的な責任が伴い、マンはこれに抗うべく、かつての言説を呼び覚ましつつ「芸術家」批判をすることで世論に訴えたのである。

けれども、こうした彼の試みは効力を成さなかった。というのも、上述の、「芸術家」をめぐる二つの言説は一見全く異なるものようであるが、この両者には構造的にいかなる差異も認められないからである。「芸術家」が自己目的としてのみ創作活動を営むのであれば、そこには普遍的に排除の構造が介在することになり、後者に対して異を唱えれば、彼は前者をも棄却しなければならない。批判の対象と、そのために持ちだされる根拠とが同じ言説に囚われている限り、このジレンマから彼が解放されることはないのである。

ではこの物語の主人公ジークムント M は、こうした言説に対してどのような態度をとったのであろうか。この人物には、唯美主義、排他的・反=社会的性格といった特徴が与えられている。この点では、ジークムント M も同様に、マンが描いてきた「芸術家」の典型であると言える。彼は文学に対する親しみを持ち合わせ、絵画教育を受けており、その意味では「芸術家」に典型的な特徴を持ち合わせているのだが、マンは、ジークムント M を「芸術家」としてではなく、「ディレッタント」として描こうとするのである。この主人公は大金をはたいて絵画を学ぶものの、その才能には乏しく、膨大な蔵書を有しながらも、それらは結局のところ装飾品でしかない。彼の関心事といえ、日々の身支度であるとさ

<sup>9</sup> 蓮實重彦『物語批判序説』（中央公論社 1985年）、64-66頁参照。

れる。<sup>10</sup> このようにジークムント M の人物造形に際しては、『トニオ・クレーゲル』の主人公に見られるような、マンにおける自己批判と弁護とが入り混じったところの両義的な特徴が消失しているのである。

ここで注目すべきは、マンがヴァーグナーについて語る際、必ずと言っていいほど「ディレッタント」あるいは「ディレッタンティズム」という用語を用いていることである。この用語にはヴァーグナーの大衆人気を揶揄する意図が含まれているのだが、そのことを念頭に置けば、以下の二つの批判を読みとることが可能であろう。まず、ヴァーグナーの作品が持つ扇動的な効果についてである。このことは「ヴァルキューレ」の兄妹の一連の行動を熱狂しながら模倣するジークムント M とジークリント M が極めて滑稽に描かれている点に求めることができる。そのことを示唆するかのように、マンはヴァーグナーについての批判的な言及をなし、彼をデマゴグと評しはじめるのである。次に、ジークムント M を介したかつての自己への批判である。青年期のマンはジークムント M 同様、他者、とりわけ大衆との差異を誇示しているのだが、実際には大衆同様、「ディレッタント的」なヴァーグナー作品に夢中になっていた。しかし、徐々にヴァーグナーに批判的な眼差しを向けはじめるようになり、ヴァーグナーからの多大な影響を受けた自らの「芸術」への疑念を抱き始めるようになる。こうしたマンの態度が、先鋭化された自己批判としてジークムント M の人物像に反映されているのであり、そのことによってマンは、意識するかどうかにかかわらず、自らの「ディレッタンティズム」を認めることになるのである。こうしたマンの葛藤は、ジークムント M の台詞として以下のように記されている。

彼は自分自身の生活をかえりみた。軟弱と機智、わがままと拒否、贅沢と反論、豊富と理性の明敏さ、豊かな安逸と嘲弄的な憎悪とから構成されたこの生活を。そこには一切の体験もなく、あるのはただ論理の遊戯であった。またそこにはいかなる感情もなく、単に生命を押し殺すような表現があるばかりであった。(456)

マンが他者との差異を強調し、排他的に振舞う人物を没個人的に描いていることは、先立

---

<sup>10</sup> Mann, Thomas: *Wälsungenblut*. In: *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe frühe Erzählungen 1893-1912*. Frankfurt am Main 2004, S. 443. 以下では *Wälsungenblut* とのみ表記し、引用箇所に関しては本文中の括弧中に頁数を示す。

つ箇所で述べた言説からの脱却を目指したものであると解釈することができるであろう。しかし、彼は依然として「芸術」を社会から切り離されたものとして捉えており、ある意味での変遷は認められるものの、あくまでヴァーグナー批判という枠組みに収まったままでいる。すなわち、彼の作品は相変わらず自己目的のための作品としてのみ捉えられていると言わざるを得ない。このことは、小説の結末の文章にとりわけ顕著に表れている。

この小説の結末部では、ジークムント M が妹の婚約者ベッケラートについて悪意を込めた言葉を口にしているが、その際彼はイディッシュ語を交えた表現を用いる。ジークムント M はその顔に「彼の血族のしるし *Merkzeichen seiner Art*」(463) をはつきりと表わしながらこう言う——「どうなるかだつて？ 僕たちはあいつを出し抜いたんだよ、——あの異教徒をな *was wird mit ihm sein? Beganeft haben wir ihn, ——den Goy.*」(ebd.)。この *Goy* という言葉はイディッシュ語で「非ユダヤ人」、「異教徒」、特に「キリスト教徒」を意味する。<sup>11</sup> 同様に *beganeft* は、イディッシュ語で「盗む」という意味の *baganvenen* の過去分詞形 *baganvet* が変形したものであると考えられる。<sup>12</sup> この文章は当然のようにその人種主義的モチーフの露骨さから、掲載予定であった雑誌の編集長によって変更を求められるが、それを受けてマンは、どのように変更すべきかを兄ハインリヒに書簡で相談している。文章を変更すべきではないという旨の返事を受け取り、マンも書籍化する際にはそのままの文章で発表する決心をしたことが、これに続く書簡には綴られている。しかし彼は雑誌の掲載用には新たな文章を準備した。<sup>13</sup> 彼が、編集長の意向に従った理由として次のことが挙げられている。マンはこの作品を通して、その他の部分でも主人公がアリア人ではないということを度々暗示しているし、後のエッセイではこの作品について「ユダヤ人の双子の物語」と述べてもいる。しかし他方で、作中では彼らがユダヤ人であるということが明確には語られていない。そのため *»beganeft«* という単語が「心理的に

<sup>11</sup> 上田和夫『イディッシュ語辞典』（大学書林 2010年）、415頁。

<sup>12</sup> 上田和夫『イディッシュ語辞典』前掲書、320頁。尚イェンス・M・フィッシャーが言うようにドイツ語では *»betrügen«* にあたる語である。Fischer, Jens M.: *Thomas Mann: Wälsungenblut (1906)*. In: *Fin de siècle Kommentar zu einer Epoche*. München 1978, S. 236.

<sup>13</sup> 1974年にフィッシャー社から出版されたトーマス・マン 13巻全集には変更後の文章が載せられている。やはりこの全集が出された当時、露骨にユダヤ問題に触れる文章を載せることは憚られたのであろう。尚、本稿で参照している 2000年代に新たに出版された全集にはイディッシュ語の文章が採用されている。



は百パーセント正しい」<sup>14</sup> と主張しながらも、「それまでの文章スタイルから少しはみ出してしまおう」<sup>15</sup> という編集長の意見に譲歩したのであり、少なくともマン自身が述べるところでは、そうしたスタイル（文体）の均整という観点から、編集長の要請を受け入れたのである。<sup>16</sup> ではどのようにこの表現は「心理的に」正しいのだろうか。ここにもやはり、この作品のヴァーグナー・パロディーとしての性質が見出されるであろう。というのも、「ヴァルキューレ」第一幕を締めくくる、「ヴェルズングの血よ、栄えあれ！」という台詞の人種主義的モチーフは風刺的に翻案されていると見なすことができるからである。「ヴァルキューレ」の兄妹に憧れ、彼らを模倣するジークムント M を滑稽に描くことによって、マンは一見ヴァーグナーへと寄り添うかのように振舞いながら、実のところ離反を表明しているのである。このように考えれば、»beganft«（「出し抜く」あるいは、より原語に忠実な意味では「盗む」）という単語が心理的に正しいということにも納得ができる。

とはいえ、ゲルマン人との差異を誇張し、自身の両親をも軽蔑するジークムント M が、「イディッシュ語ふうの」ドイツ語を話すことに違和感を覚えずにはいられない。この兄妹は、ドイツ人であるベッケラートよりはるかにドイツ語を流暢に用いることができ、その卓越した言語表現は、それ以前の箇所にも示されていることである。それゆえに、この箇所は特に不自然な印象を与える。もしそこにこれまで直截に表現されていない「ユダヤ人」という主題を強調する目的が含まれていたとするのなら、この表現はいささか不調和であると言わざるを得ない。あるいは、その表現にユダヤ人を誹謗する意志がなかったにせよ、いわれのない偏見から「貶められた言語」となったイディッシュ語を、滑稽さを強調する手段として、彼は用いるべきではなかった。これはユダヤ人を嘲るためになされた常套手段なのである。そうした風刺文書が集中的に書かれたのは 19 世紀半ば、ユダヤ啓蒙主義の影響により、すでにイディッシュ語が（少なくともドイツでは）ほとんど姿を消してからのことであった。<sup>17</sup> ユダヤ人が同化を求めて封印しようと努める過去が、こうした作家たちの無邪気な嘲弄癖によって執拗に蒸し返されたのである。ここには意識的では

---

<sup>14</sup> *TM-HM*, S. 42.

<sup>15</sup> *TM-HM*, S. 42.

<sup>16</sup> *TM-HM*, S. 42.

<sup>17</sup> 上田和夫『イディッシュ文化 東欧ユダヤ人のこころの遺産』（三省堂 1996 年）、206 頁。

ないにせよ、マンのユダヤ人に対する差別が露見しており、そこに彼の作品の遊戯性や無責任さが表れていると言うことができるだろう。むしろ単に道義的に作品への評価がなされるべきではないが、ここでは作者の人種差別的な自覚の有無こそが問題にされるべきなのである。

マンは自身が抱く差別意識を把握してはいないのかも知れないが、彼の作品に認められる自己批判的な人物造形は、ヴァーグナーによるゲルマンの称賛に対置するものとして一定の意味を持つ。ヴァーグナーはゲルマンの英雄を描き、その英雄を国民的歌手に演じさせることで大衆を熱狂させ、ナショナリズムの高揚を目指したが、マンにはそうした意図が認められないのである。以上の点を踏まえ、次章では作中に散りばめられた人種主義的モチーフに焦点を絞り、マンの内面性についての考察を進めてゆく。

## 2. マンとヴァーグナーにおける「血族」ないし「人種」という主題

### 2-1 ヴァーグナーと反ユダヤ主義

「ヴァルキューレ」と『ヴェルズングの血』の両作品においては、種族あるいは人種の違いが登場人物の造形に多大な影響を及ぼしている。いずれにおいても、多かれ少なかれ人種主義がテーマになっており、ここでもやはりヴァーグナーの反ユダヤ主義的傾向は無視することができない。ヴァーグナーの楽劇作品に見られる反ユダヤ主義について論じる研究は珍しくはないが、<sup>18</sup> 人種差別へのヴァーグナーの態度については大きく解釈が分かれてきた。『ニーベルングの指環』の創作に着手し始めた頃、ヴァーグナーは匿名で「音楽におけるユダヤ性」（1850）と題した論文を発表したが、そのなかで彼はユダヤ人に対する「本能的な嫌悪」<sup>19</sup> をためらうことなく告白する。

ユダヤ人は日常生活において、ヨーロッパのどの国の者が見ても、まずその不快な異質性をもった外見が我々の目につくのである。そしてそんな容貌の人間とは関わり合いたくはないとつい思ってしまう。[中略] 芸術との関連でのみ言及するならば、

<sup>18</sup> たとえば、鈴木淳子『ヴァーグナーと反ユダヤ主義—「未来の芸術作品」と19世紀後半のドイツ精神』（アルテスパブリッシング 2011年）の第二章では『ニーベルングの指環』、『ニュルンベルグのマイスタージンガー』、『パルジファル』がヴァーグナーの反ユダヤ主義と関連付けて論じられている。

<sup>19</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. Schutterwald/Baden 2010, S. 35.

このようなユダヤ人の容貌は決して芸術の対象にはなり得ない。<sup>20</sup>

いささか逆説めいて響くが、このような文言においては、語られぬままになっていることこそ無視できない重みを持つのである。この引用に限れば、ヴァーグナーはユダヤ人の容貌に矛先を向けつつも、具体的に彼らがどのような顔つきをしているのかということについて一切触れてはいない。不快感を覚える理由としては、ただ彼らの顔つきが異質であるということだけが挙げられており、その異質さは、識別可能な特徴によって裏付けられているわけではない。ヴァーグナーがここで「つい *unwillkürlich*」という表現を用いている点からは、外見に関する彼の反ユダヤ主義的感情が何ら根拠に基づいたものではないということ、さらに無根拠ゆえになおのこと根強く持続しかねない彼の差別意識の表れとして捉えることができるのである。

議論がより音楽に近づき、ユダヤ人の言葉や口調に言及する際には、ヴァーグナーのユダヤ人嫌悪はさらにその度合を増す。

とりわけユダヤ人の言葉の感覚的な表出そのものが我々に吐き気を催させるのである。[中略] 完全に異質で不快なものとして、何よりもユダヤ人の話し方に特有のシュウシュウ、キィキィ、ブンブン、モガモガといった発声が我々の耳につく。我々の国語の本来とは全く異なる使い方や、語彙や構文の勝手なねじ曲げがこの発声になおさらひどく混乱した駄弁 *»Geplapper«* という性質を付与し、それを聞いていると我々の注意はつい彼らの話の中身 *»Was«* よりも、吐き気を催すような喋り方 *»Wie«* の方に向けられてしまうのである。<sup>21</sup>

容貌と同様、ここで語られる嫌悪は感覚的なものである。さらに彼は、“ありあまる金にもを言わせるユダヤ人”という偏見を持ちだし、ユダヤ人は裕福になったことで教養を手にし、なお且つ、芸術の分野にも参入したと悪しざまに述べている。<sup>22</sup> 容貌、言葉、経済力についてのヴァーグナーのこのような嫌悪は、ユダヤ人に対する典型的な差別意識と

<sup>20</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 38.

<sup>21</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 41.-

<sup>22</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 44ff.

見なすのに十分過ぎるものであり、アドルノが『ヴァーグナー試論』（1937-38）において「ヴァーグナーの反ユダヤ主義は後の反ユダヤ主義のすべての要素を包括している」<sup>23</sup>と言うのも理由なきことではない。しかし留意しなければならないのは、ヴァーグナーの反ユダヤ主義が何ら目新しいものではないということである。彼が述べるユダヤ人の特徴は、それ以前から存在するユダヤ人カリカチュアに認めることができ、<sup>24</sup> その意味では、彼もまた反ユダヤ主義の一継承者にすぎないのである。

匿名で発表されたこの論文とほとんど時を隔てずに書き上げられた『ニーベルングの指環』には、明らかに（ヴァーグナーの抱く）「ユダヤ人」のイメージが原型となっていると思いきやたちが登場する。言うまでもなくそれは、共に醜悪な姿をしているとされるニーベルング族の兄弟アルベリヒとミーメである。彼ら二人が（言語・音声的な意味での）ユダヤ人カリカチュアの特徴を有するという解釈は、これまでも存在する。例えば鈴木淳子は、このニーベルング族の兄弟の「シュル schl-」、「ブル br-」、「グ g-」、「シュトウ st-」という頭韻が多用された非常に速いテンポの歌唱について、「話を聞くというよりも、むしろ「シュル」、「ブル」、「グ」、「シュトウ」という音の羅列を聞いているような気がする」<sup>25</sup>と述べている。もちろんヴァーグナーの反ユダヤ主義を、彼の楽劇、特に言語表現を除く純粋な「音」に関連付けるにあたっては、最大限の慎重さが必要とされることは言うに及ばない。反ユダヤ主義がヴァーグナーに由来する「音」に充滿しているといった論旨は、「音楽におけるユダヤ性」の著者のあやまちと同列であると言うべきである。ここで言及した先の研究は、当然そうした短絡的な論理によってヴァーグナーを弾劾しているわけではない。重要なのは、ヴァーグナーが『ニーベルングの指輪』のなかでアルベリヒとミーメに与えたところの差別的な特徴を捉えることなのであり、このような特徴が、『ヴェルズングの血』の登場人物たちに受け継がれることになる。

## 2-2 ニーベルング族とヴェルズング族の類似

ここではまず、『ヴェルズングの血』の主人公の両親アーレンホルト夫妻から取り上げ

<sup>23</sup> Adorno, Theodor W.: *Versuch über Wagner*. München/Zürich 1964, S. 23.

<sup>24</sup> Vgl. Fuchs, Eduard: *Die Juden in der Karikatur Ein Beitrag zur Kulturgeschichte*. Berlin 1985.

<sup>25</sup> 鈴木淳子『ヴァーグナーと反ユダヤ主義—「未来の芸術作品」と19世紀後半のドイツ精神』前掲書、104頁。

ていきたい。彼らには、ヴァーグナーによってニーベルング族に与えられた特徴がそのまま付与されている。

アーレンホルト氏は古書を読んでいた図書室から小刻みな足どりでやってきた。[中略] 彼は静かに両手をこすり合わせながら、彼の弱々しく少々内気な調子で尋ねた。「ベッケラートはまだかね。」(429)

アーレンホルト氏からは小さく落ち着きがないという印象を受ける。さらに、弱々しく少々内気であるという性格付けがなされていることから、アーレンホルト氏とアルベリヒとの類似を考えることができるだろう。<sup>26</sup> かつてのアーレンホルト氏に、マンは「虫けら Wurm」(434) という一語を充てている。『ニーベルングの指輪』においてニーベルング族全体が Wurm と呼ばれていることを考えれば、こうした語の選択を偶然の一致として片付けることはできない。また、アルベリヒが黄金の力で地下世界ニーベルハイムを支配し、ニーベルング族の者たちを採掘と冶金に従事させていること、アーレンホルト氏が炭坑の開発に成功し、巨万の富を手にしたということをつけ加えれば、二人の類似性についての指摘は十分なものとなるはずだ。他方アーレンホルト夫人についての記述は、作中わずかな数箇所である。彼女の容貌は「小さくて醜く、早くから老け込んでおり、まるで異国の激しい太陽のもとで枯れたようであった」(429) と言われている。物語の中心人物ではなく、読者の興味をひきつける女性とは到底言えない彼女の振舞いについての描写は、以下のようなものである。

アーレンホルト夫人はががつと食べており、いつものように、専らほとんど何の役にも立たないような反問でもって答えるばかりであった。彼女の話しぶりには奇妙で声門音が多い言葉や、幼少期の方言の言い回しが混ざっていた。(傍点引用者：435)

アーレンホルト夫妻には、ヴァーグナーを含む反ユダヤ主義者たちがユダヤ人を形容する

<sup>26</sup> せかせかとすばしこく動きまわるのはアルベリヒにしても同様であり、高辻知義による解説によれば、ヴァーグナーはこのニーベルング族の小人を幾度も「心配性の」「不安な」と形容している。リヒャルト・ヴァーグナー『ニーベルングの指環(上)』前掲書、24頁。

際に口にする、紋切型の特徴が付与されている。エドゥアルト・フックス (1870-1940) が「近代のカリカチュアでは、たいていは単純化と強調という二つの方法が結び合わされて登場している」<sup>27</sup> と言うように、彼らが「ユダヤ人」であるか否かについて明言される必要はなく、これを提示するには単にユダヤ人カリカチュアに描かれる特徴をそのまま採用するだけで十分なのである。むしろ、カリカチュア自体が否定されるべきではない。というのも、本来カリカチュアとは、ある事象の内部にある本質的特徴を白日の下にさらす技法であり、笑いと涙を含む優れた表現の可能性を有しているからである。しかしここではそうしたプロセスが省略されており、このような象徴化、あるいは記号化という手法は、明らかにそれを用いる者の独創性の欠如を示している。

ところでアーレンホルト氏の人物造形には、否定的にのみ描かれるニーベルング族には見られない微妙な屈折が施されていると言えるのではないだろうか。なぜならアーレンホルト氏は、その「大胆で賢明な仕事ぶりと、鉱山、つまり炭層の発見を対象とした大がかりな事業を手段として」(434f.) 莫大な財をなしたからである。盗んだ黄金の指環の魔力で、不正に地下世界を支配しているアルベリヒとは異なった性質が、ある種の美德としてアーレンホルト氏には付与されている。その卑小さを描くことでアーレンホルト氏に否定的な色合いが与えられているのは事実だが、はっきりと彼の成功が彼自身の(つまり不当でない) 努力の結果であることも告げられているのである。

彼 [アーレンホルト氏] は子供たちが彼を軽蔑していることを知っていた。[中略] それを知りながらも、多少は認めざるを得ないと思っていた。[中略] しかしまさしくこのようなことを痛切で自虐的に感じる能力こそ、彼が成功に至った、かの粘り強く決して満足しない努力の源泉となっていたのである。(434)

マンはアーレンホルト氏を子供たちから軽蔑される存在として描く一方で、彼を擁護してもいるのである。

このように、ヴァーグナーはアルベリヒとミーメをユダヤ人カリカチュアによって特徴付けており、彼らの人物像がそのままアーレンホルト夫妻に引き継がれている。その意味

<sup>27</sup> Fuchs, Eduard: *Die Juden in der Karikatur Ein Beitrag zur Kulturgeschichte*. a. a. O., S. 98.

で、マンは、ヴァーグナーによって否定的にのみ描かれるニーベルング族を擁護し、その偏りを部分的に修正する翻案を行ったと言える。こうしたマンによる擁護は、ヴァーグナーによってニーベルング族に重ねて捉えられているところのユダヤ人に向けられたものであると見なすことができるのである。

次にアーレンホルト家の双子に注目したい。彼らは、ヴァーグナーが「音楽におけるユダヤ性」において語っている「教養あるユダヤ人」に対応している。ヴァーグナーはさらに、周囲から際立ったその容貌を、むしろ喜ばしく感じているユダヤ人がいると述べている。

最近ではしかし、ユダヤ人がこの不幸をとて心地よく感じているということがわかってきた。彼らの成功からすれば、我々との違いが勲章と思われるのも当然である。

-28-

ドイツ人に対する異質性によって排斥されることを「不幸」として捉えるのではなく、むしろ、彼らへの「優越」として感じ取るユダヤ人の姿は、すでに触れた、『ヴェルズングの血』のジークムント M とジークリント M によるアーリア人蔑視と重ねられる。そこにはヴァーグナーが嫌悪する「ユダヤ人」の特徴が彼らの両親同様、この双子にも投影されている点を認めることができるだろう。さらにヴァーグナーがユダヤ人によるユダヤ人蔑視について以下のように述べる箇所は、そのままマンによるアーレンホルト家の双子についての記述としても読むことができる。

教養あるユダヤ人は、下層の同胞に目立つあらゆる特徴を取り去ろうと想像を絶する努力を重ねたのである。[中略] しかしこのような努力は教養ユダヤ人たちに、期待された成果をもたらそうとはしなかった。それは彼を完全な孤立へと導くのみであった。[中略] 上流ユダヤ人は、このような自然な共同体から完全に締め出され、自分の一族とのつながりからも引き離された。彼らにとっては、自身が金で買って習得した教養も、根本においてそれで何を始めたらいいいのかわからないため、結局は贅沢品

---

<sup>28</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 38.



にしかならなかった。<sup>29</sup>

マンは、ジークムント M とジークリント M を人種主義に基づく排他性により社会から孤立している存在としてのみならず、自らの両親という「自然な共同体」ないし「自分の一族」との間にすら隔たりを持つ人物として描いている。ここでヴァーグナーが否定的に語る「贅沢品」、すなわち無用の長物となった教養とは、「ディレクタント」として描かれるジークムント M の、装飾品でしかない膨大な蔵書に対応していると言えるだろう。

ヴァーグナーの論文及び楽劇とマンの作品を並列させることで、後者においてジークムント M を語る箇所の意義がさらに重みを増すことになる。そして注目すべきは、マンのジークムント M とヴァーグナーのアルベリヒが共に毛深さによって特徴付けられていることである。アルベリヒが人々の口の端にのぼるとき、彼は「毛むくじやら」で、「もじゃもじゃの髭」と「チクチクする髪の高い巻き毛」に覆われているとされる。<sup>30</sup> マンにおいても作中度々、ジークムント M の毛深さが強調されている。ジークムント M は日に二度



も髭を剃り、黒くて濃い巻き毛は強引に片側へと撫でつけられ、<sup>31</sup> 上半身は黒々とした毛に覆われている。

<sup>32</sup> このようにマンは、ジークムント M に自身の毛深さを気にさせ、異常なほど几帳面に身だしなみを整えさせるのである。ここには、自身に現れるアルベリヒと共通する特徴を隠ぺいしようとするジークムント M の姿が見て取れる。ヴァーグナーが「ユダヤ人」を意図しながら描いたニーベルング族の特徴は、マンによって、アーレンホルト夫妻のみならず、ジークムント M にも付与されているのである。

もちろんアーレンホルト家の双子には、ニーベルング族ではなく、現代のヴェルズング族としての名が与えられており、そのことでマンは、ヴァーグナーが嫌悪するユダヤ人と

<sup>29</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 44ff.

<sup>30</sup> リヒャルト・ヴァーグナー『ニーベルングの指環（上）』前掲書、19、22頁。

<sup>31</sup> Vgl. *Wälsungenblut*, S. 430, 441.

<sup>32</sup> Vgl. *Wälsungenblut*, S. 445.



彼が英雄として創作したヴェルズング族の間に、あろうことが生じてしまう類似性を提示したのである。実際この両者の間には「孤立」という共通点が見出されるのだが、そのことがヴァーグナーの単なる誤りなのか否かについては、ヴァーグナーによる英雄ヴェルズング族の位置付けによって明らかになるであろう。

『ニーベルングの指輪』に登場するヴェルズング族の双子には常に不幸がつきまとい、ジークムント W は、どこへ行っても人々から忌み嫌われる存在であると自らを語る。

いくら多くの人に出会い、 / どこで彼らに出くわそうと、  
友を、 / そして女を得ようと努めても、  
いつも私は遠ざけられ、 / 不幸が私に付いてまわった。

[中略]

どこに居ようとも、 / 争いに巻き込まれ、  
行く先々で、 / 怒りを向けられた<sup>33</sup>

ジークムント W は人々から忌み嫌われる人物であるが、彼が人々から冷遇される理由については一切開示されない。この嫌悪は、ジークムント W が単に他所者であるがゆえに被るものであろう。もちろんこのことは、神ヴォータンから運命を与えられ、理不尽な嫌悪・逆境をも乗り越える存在を英雄として描き出すところのヴァーグナーの意識の現れとして捉えることができる。その意味で、ヴァーグナーが描くところの英雄に向けられた怒りや嫌悪は、彼がユダヤ人に対して抱く「本能的な嫌悪」<sup>34</sup> と余りにも似ているのである。ヴァーグナーにおける登場人物の類似性に注目しながら、つぎに、マンによって脚色されたジークムント W とアーレンホルト家の双子の「言葉」に注目してみたい。『ヴェルズングの血』の作中で劇中劇として描かれる「ヴァルキューレ」第一幕において、ジークムント W がそれまでの人生の苦悩を語る場面には、「彼の言葉は、世の人々の言葉とは違っており、そして彼らのものは彼のものとは違っていた」(451) というマン独自の台詞が挿入されている。これを先に見たヴァーグナーによるユダヤ人の特徴と比較すると、ヴァー

<sup>33</sup> リヒャルト・ヴァーグナー『ニーベルングの指環 (上)』前掲書、151頁。

<sup>34</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 34f.

グナーが、異質に響くがゆえに不快感を与えるもの、「内容 Was」の欠如した形ばかりの「喋り方 Wie」<sup>35</sup> として否定的にのみ捉えていたあの口調が、マンによってやや重心をずらされ、肯定・否定の区別がなされない中立的なものに置き換えられているということが確認できるであろう。このことは、アーレンホルト家の子供たちの話し方にも、同様に認めることができる。

兄妹たちの話しぶりは達者で辛辣である。攻撃的なように見えるが、しかしただ生まれつき防衛本能からそうするのもかもしれない。人の気持ちを傷つけるような口をきくが、おそらくただ単に上手い言い回しをする喜びからそうするのであって、彼らに腹を立てるようなことは気のきかない話だろう。(432)

上の引用からは、マンが、ヴァーグナーによって批判されるどころのユダヤ人の話し方を擁護しようとする姿勢が見て取れる。マンはもちろんアーレンホルト家の子供たちの排他的な態度を肯定的に描いているわけではない。しかし彼らも同様に、世間から疎外された存在であるということが、そこでは示されているのである。

マンは、ヴァーグナーが辛辣に揶揄しているユダヤ人のうちに、ヴァーグナーが抱いていたであろう意識を超えたものをも捉えようとしている。日常的な領域から貶められる存在が、逆転的に、上方へと突き抜ける存在として描かれる点には、マンのヴァーグナーへの同調と離反を読み取ることができるであろう。マンは、ヴァーグナーが批判の対象とするユダヤ人、「ヴァルキューレ」のニーベルング族、ヴェルズング族の双子、『ヴェルズングの血』のアーレンホルト夫妻ならびにその双子という異なるグループに共通する特徴を浮かび上がらせることにより、ヴァーグナーの称賛するところのものが、奇妙なループで彼の批判するところのものと酷似するという驚くべき事実を描き出そうとしているのである。

このように、マンとヴァーグナーのユダヤ人に対する考えは、人種の違いからユダヤ人が社会において際立つ存在であるという点において一致している。ヴァーグナーの嫌悪が一方的であるのは、彼が、自身の嫌悪がともすれば自らに向けられ得ることを十分に認識

---

<sup>35</sup> Wagner, Richard: *Das Judentum in der Musik*. a. a. O., S. 46f.

していないからである。しかしすでに確認したように、マンは自身をアウトサイダーとして捉えているので、自らを批判し弁護する姿勢が、そのまま彼のユダヤ人理解へと繋がっていく。このように人物をイロニーとして造形することで、『ヴェルズングの血』は当初反ユダヤ的と目されていた。しかし、実際には、露骨な人種主義を含む『ニーベルングの指環』に目立たないながらもそれを対置させており、その意味では、マンのイロニーを評価する際に慎重さを要するということが明らかになったと言える。こうした点を踏まえ、以下では『ヴェルズングの血』において、このイロニーを構成しているヴァーグナー批判とユダヤ人擁護の関係について考察を進めたい。

### 2-3 ヴァーグナー批判の目的

マンはヴァーグナーが対極にあると考えていた者同士の類似を示すことで、ヴァーグナーの人種主義を揶揄している。しかし他方では、マン自身にも人種というテーマへの強いこだわりがあるのも事実である。それは彼自身の「混血」としての意識と無関係ではない。

自伝的小説『トニオ・クレーゲル』において明瞭に表わされているのは、「混血」であることが主人公トニオに強いる運命である。作家と同様、折り目正しく憂鬱な気質の北ドイツ人の父と、官能的で情熱的な南方の血を引く母を持ち、双方から受け継いだ気質ゆえに、彼の生は決して穏やかなものではなかった。<sup>36</sup> トニオは、自分に流れる二つの血のどちらにも愛着と侮蔑の念を抱き、その引き裂かれたあり方は、「これは疑いもなく、並外れた可能性と——同じく恐ろしい危険を孕んだ一つの混合なのです」<sup>37</sup> という言葉によって示されている。この並外れた可能性とおそろしい危険は、伝説や神話において語られる近親相姦にも当てはまる。そうした世界にあっても近親相姦はタブー視されるが、他方で、それが既成の秩序を転覆させる強力な力を持つものとして認識されていることに注目しなければならない。<sup>38</sup> 古典古代の伝説を下地にした「ヴァルキューレ」に描かれる近親相姦もまた、この系統に属している。その意味で、マンもヴァーグナー同様、登場人物に対する評価を彼らのなかに流れる「血」に基づいて行うのである。

なるほどマンは、「純血」に基づく人種主義には否定的である。しかしそれとは対照的

<sup>36</sup> Mann, Thomas: *Tonio Kröger*. In: *TM-GW*. VIII, S. 337.

<sup>37</sup> Mann, Thomas: *Tonio Kröger*. In: *TM-GW*. VIII, S. 290f.

<sup>38</sup> 吉田敦彦『神話と近親相姦』（青土社 1993年）、27-30頁参照。

なものとして描かれるところの「混血」あるいは人種的マイノリティに対しては、異なる態度を示すのである。彼は、たとえその存在が排他的に振舞おうとも、その存在を批判する一方で弁護しさえするのであり、それは人種主義によって排斥された人々を擁護するためのものであると考えられる。しかし彼もまた人種あるいは血族というイデオロギーに囚われた存在なのであり、このような批判では、再び人種主義の網にからめ捕られる危険に曝されてしまう。

では、なぜマンはユダヤ人を擁護するのであろうか。おそらくそのことは、極めて個人的な理由に拠る。1907年に書かれたエッセイ「ユダヤ人問題の解決」でマンは、彼がユダヤ人問題を扱うことについて次のように述べている。

作家がユダヤ人問題を差し当たり個人的——人間的葛藤、純粹に心理的な問題——つまり最高の魅力のひとつであると見なすならば許してやってほしい。いたるところで他所者であると見分けのつく、心中の例外のバトスとして、彼〔作家〕は特殊な存在形態のひとつを示している。<sup>39</sup>

マンはユダヤ人を自身と近い存在と捉えており、それゆえにジークムント M の人物像には、多分にマンおける自己批判的要素が含まれるのである。こうした描き方は、一方的に他者を非難するヴァーグナーのそれに対置するものとして評価できる一方で、専ら自己にしか関心がないということを示してもおり、ユダヤ人に限らず、彼が描くものの背後には常に彼自身の姿が見出されることになるのである。

先に言及したように、マンは『ヴェルズングの血』において伝統的な芸術家像に則した自らの芸術観を批判的に捉えようとしたのであるが、他方では、こうした芸術観をユダヤ人擁護の根拠にしている。すなわち、マンはユダヤ人擁護を社会的ではなく、個人的に、「芸術家」としてあるいは自己目的的に捉えようとしているのであり、そのことは彼がユダヤ人をとりまく状況を依然として「ユダヤ人問題」として認識できていないことを顕著に示している。また、ヴァーグナーへの執着も同様に、そうした自己目的に含まれていると解釈することが出来るであろう。ヴァーグナーはマンが批判しつつも生涯を通じて意識

---

<sup>39</sup> Mann, Thomas: *Die Lösung der Judenfrage*. In: *TM-GW*, XIII, S. 459.

し続けた芸術家であり、かつては単に憧れの対象であったヴァーグナーが、次第にのりこえるべき存在となったのである。そうした意識はすでに『トリスタン』（1903）にも表れているが、『ヴェルズングの血』では極めて先鋭化された表現によってこのことが示されている。

このように見てくると、マンによるユダヤ人擁護の背後にも、ヴァーグナーへの意識があったと理解することができる。繰り返すが、このパロディーはヴァーグナーが批判するものと称賛するものとの類似を示している。すなわちここではヴァーグナーへのイロニーが主要な目的とされ、ユダヤ人擁護はあくまで副次的に表わされたものと見なされるべきなのである。

## おわりに

マンが作家活動を開始した遙か以前に「芸術」は市民権を獲得し、人々に共有されるものとなっていた。彼はこうした風潮に抗し、「芸術家」を貶めることで自らと大衆との差異を強調しようとしたのだが、もちろん、そこで大衆との間に引かれる境界線は虚構のものである。このことは皮肉にも、当時彼の作品が多く読者を獲得したことによって証明される。彼のこうした「他とは異なる」という意識すら、すでにありふれたものとなっていた。また、彼の「芸術家」という自己意識が「他とは異なる」という意識と密接に結びついていたため、時には辛辣なまでの自己批判を交えて、彼は混血やユダヤ人、あるいは身体的な疾患を持つ人物、さらには王公を自己に引き寄せて描くことになった。すなわちマンは、単に自らの特異性を誇示するための手段として、これら「マイノリティ」を登場させたのである。

当然これらの作品は社会的、政治的批判をなすために著されたものではなく、卑俗な好奇心と自己目的によって創作された。むしろこのことにより、無責任な、それゆえに差別的なものとなりかねないのである。マンが舅の反対を受けてこの作品を撤回したという事実だけを捉えても、『ヴェルズングの血』には、彼の無意識の差別感情が備わっていると言えるだろう。そして発表が差し控えられたことにより、逆に彼のユダヤ人差別を疑う噂が広がったと考えられるのであり、そのことで本来意図していたヴァーグナー批判が見過ごされがちになったのである。以上のように、マンによるユダヤ人擁護の背後には、依然

として社会のアウトサイダーとして認識されていたユダヤ人という存在への憧憬と無意識の差別が混在しているのである。反ユダヤ主義的と目された『ヴェルズングの血』にはこのような彼の葛藤、すなわち自己への批判と弁護が見出されるのである。